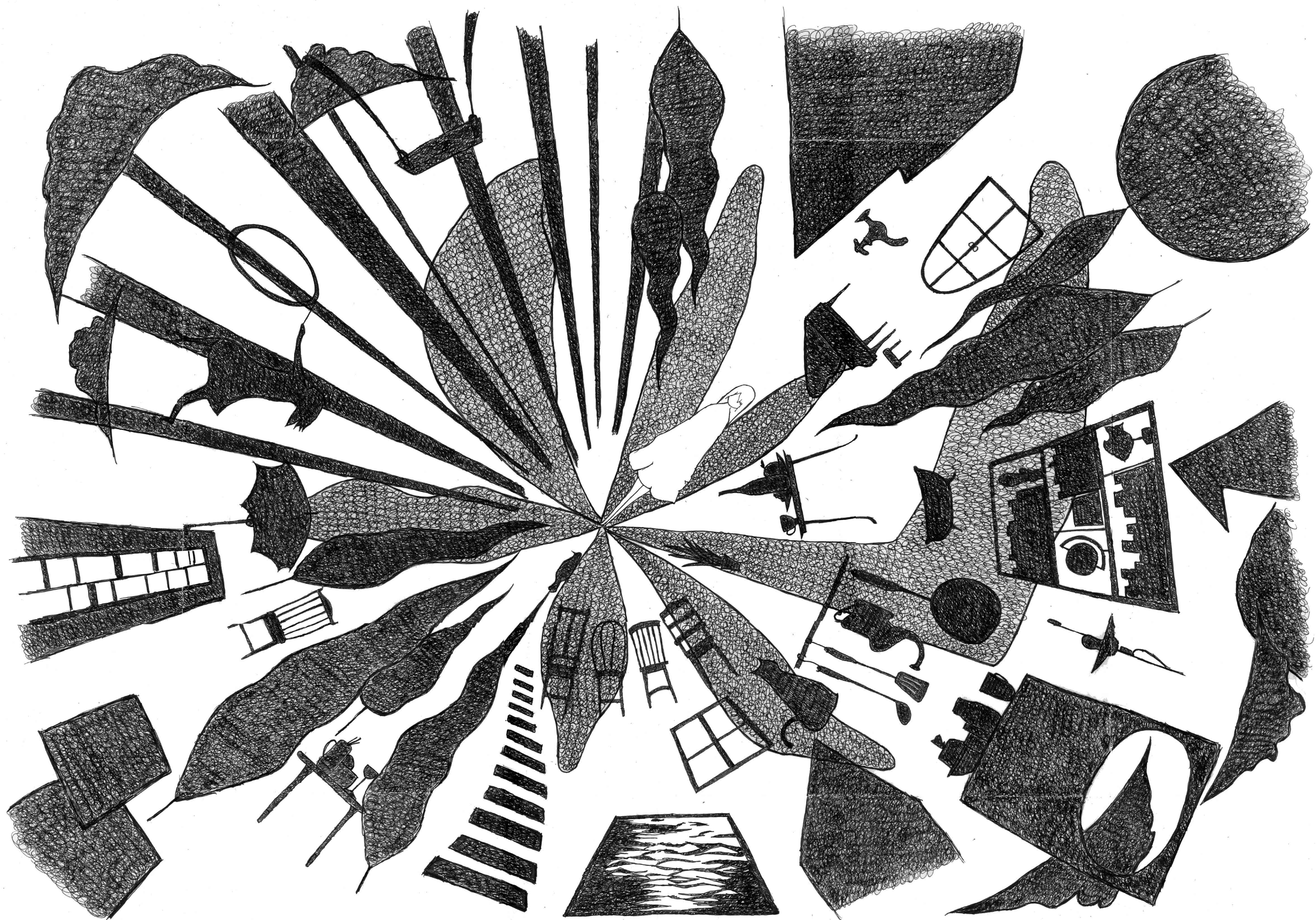




小さい伝記、音のない記憶

影。

現実世界の落とし物。存在をわたしたちに伝えるもの。

ただそれは、二次元に投影され、色彩情報も音声情報も奪われた不完全なものであり、いわばその物体からの小さな小さな伝記。

ふと、その小さな伝記に意識を傾けてみれば、わたしたちはその黒い平面から、そのものの色や形、歴史、物語のイメージを膨らますことができるだろう。

それはもしかしたら、その物体そのものを見るより、より印象的で心に深く刻まれるものになるかもしれない。

そのときの感動は、モノクロ写真を見たときのそれとよく似ている。



スクリーンの計画

この建物は、影の投影されるスクリーンである。

わたしたちはこの建物を巡る中で、様々な影を落とす。

そしてその影は、建物自体の影、他人の影、家具の影、周囲の樹木の影、雲の影とともに、このスクリーンに影の世界を形成する。

この建物の用途は特には設定していない。

それぞれの空間がどのような使い方をされるかによって、このスクリーンに落ちる影は変わってくる。

影の感じ方、捉え方も場面場面によって変わってくるだろう。

普段わたしたちは無意識のうちに影を落とし、それを気に留めることもほとんどない。

本を開くと、白いページに木の影が落ちる。

ひなたぼっこをしていたが、いつのまにかそこは日影になっている。

そんなときに、ふと感じる影の存在を、この空間では強く感じるようになる。

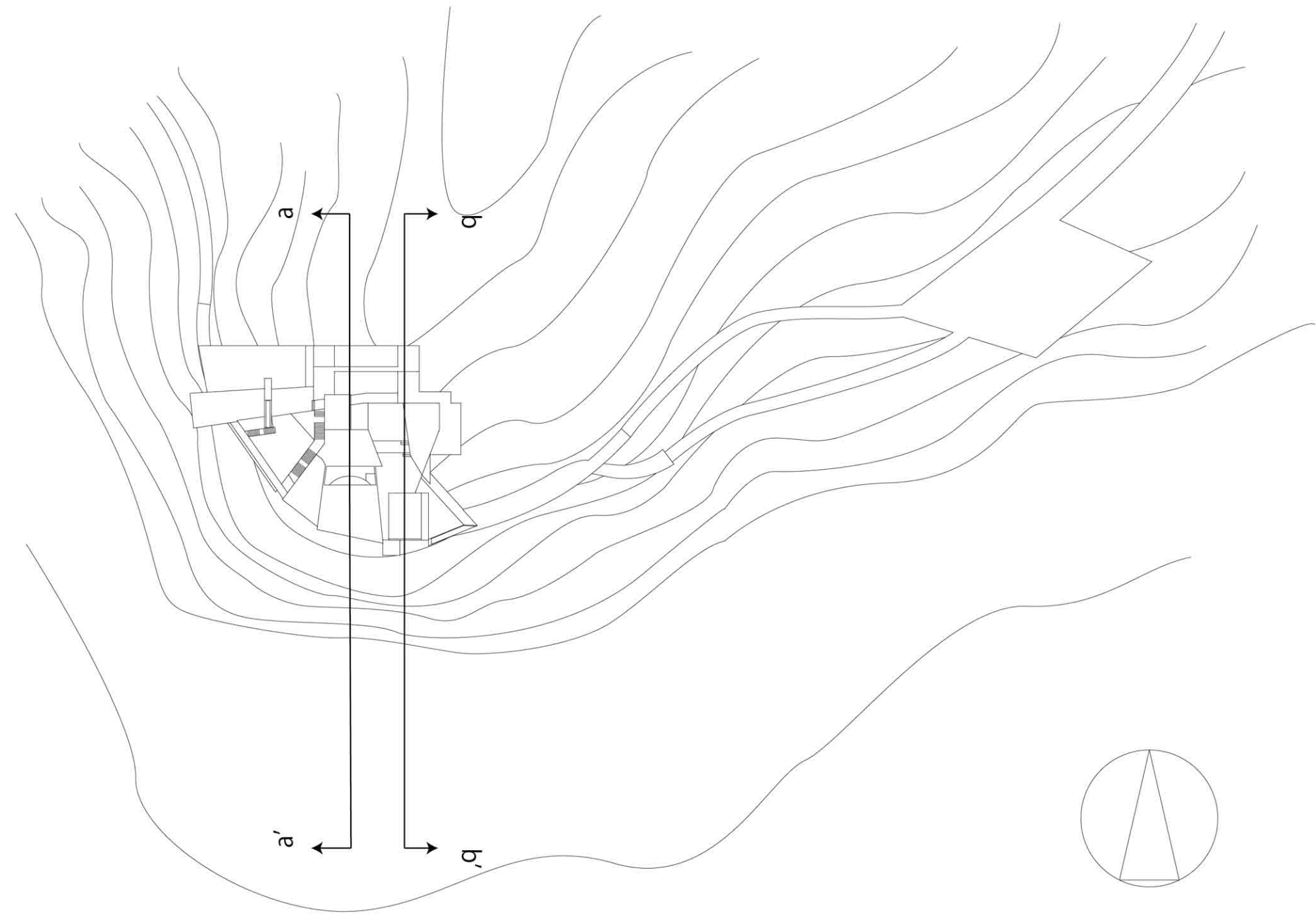
この建物は、わたしたちに影を強く意識させることで、通常ならサブであるはずの影の世界をメインの世界へと昇華させ、

無秩序に複雑化した現代社会を、二次元世界、白と黒の世界へ還元させる機能を持つ。

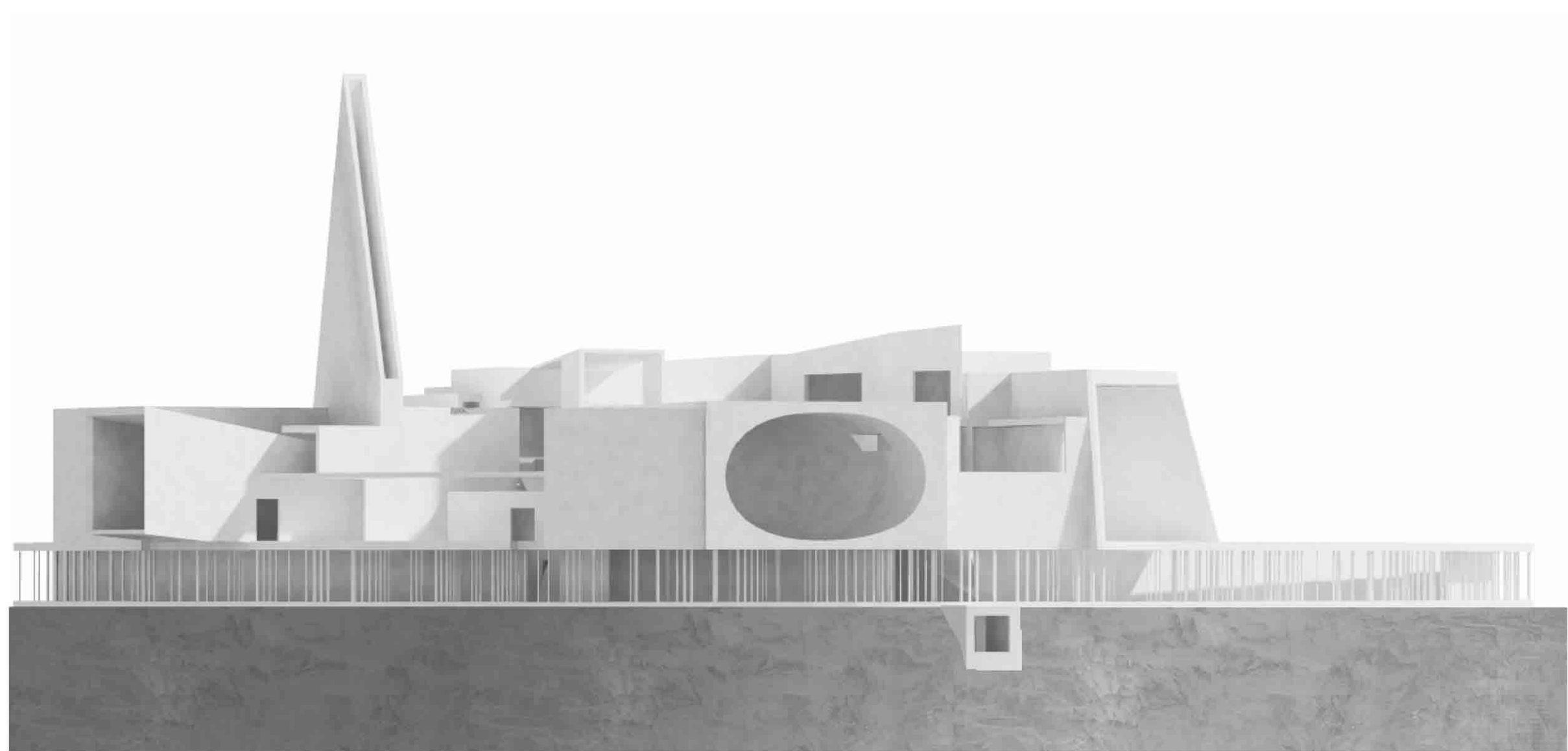
これにより都市の喧噪を逃れられる新たな空間を創出することができる。

敷地は都心を少し離れた湖の半島の先端部で、日当りの良い南向きの傾斜地である。

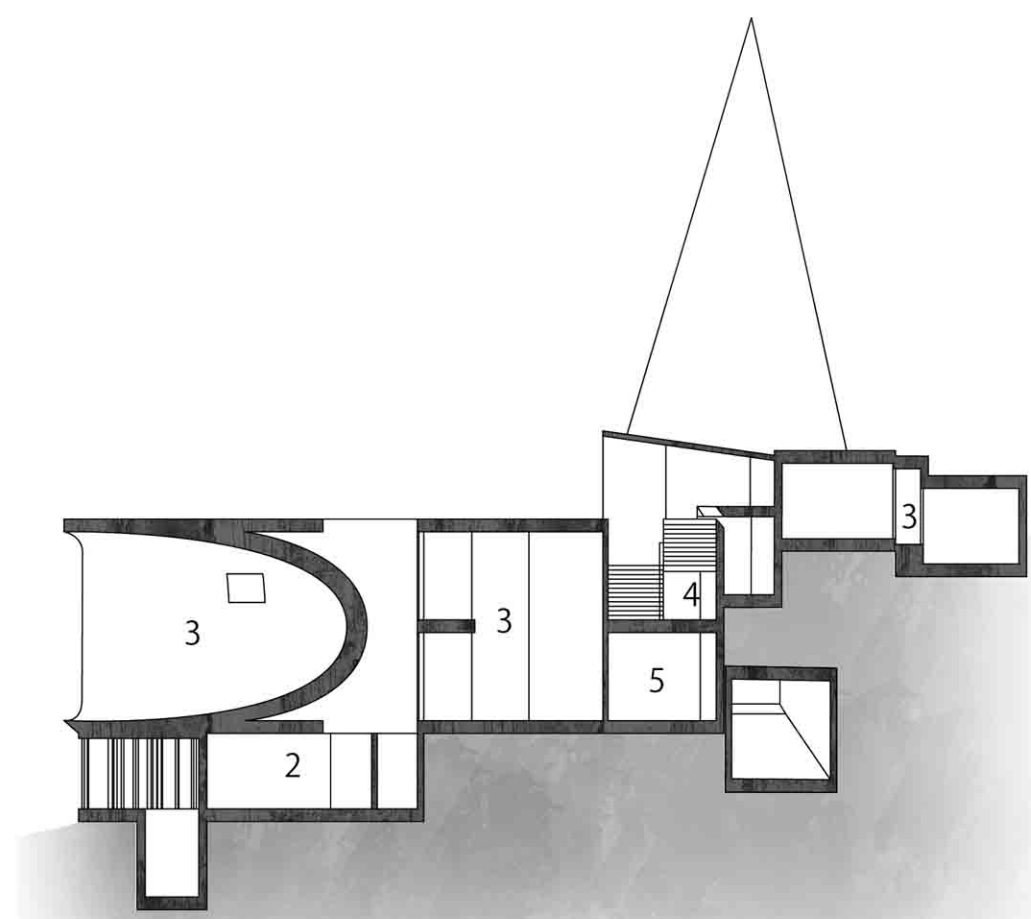
そこは都会のオアシスとして、わたしたちは本当の平穏を得ることが出来る。



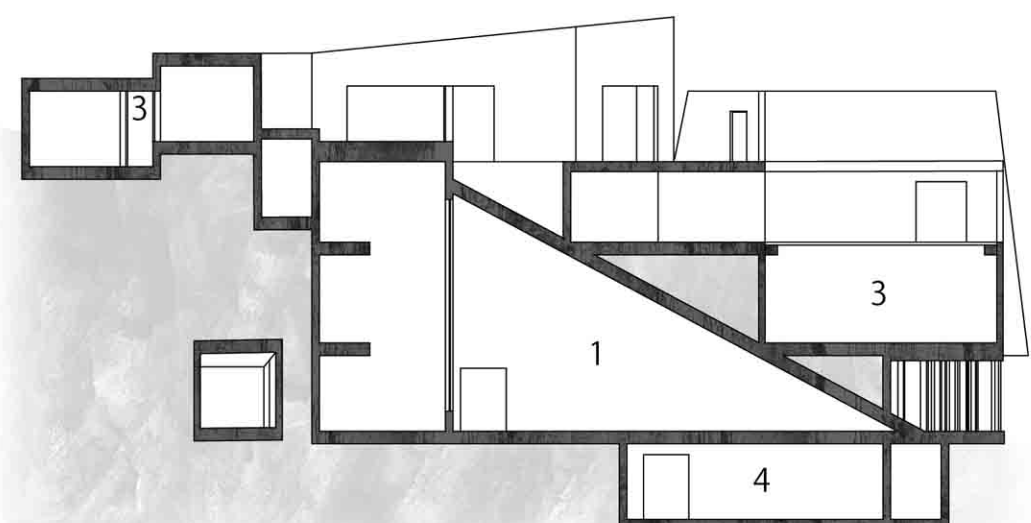
SITE PLAN 1/1000



PERSPECTIVE

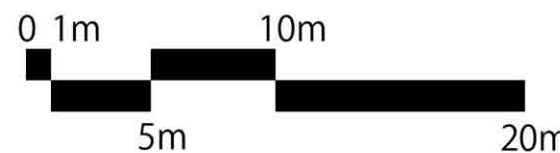


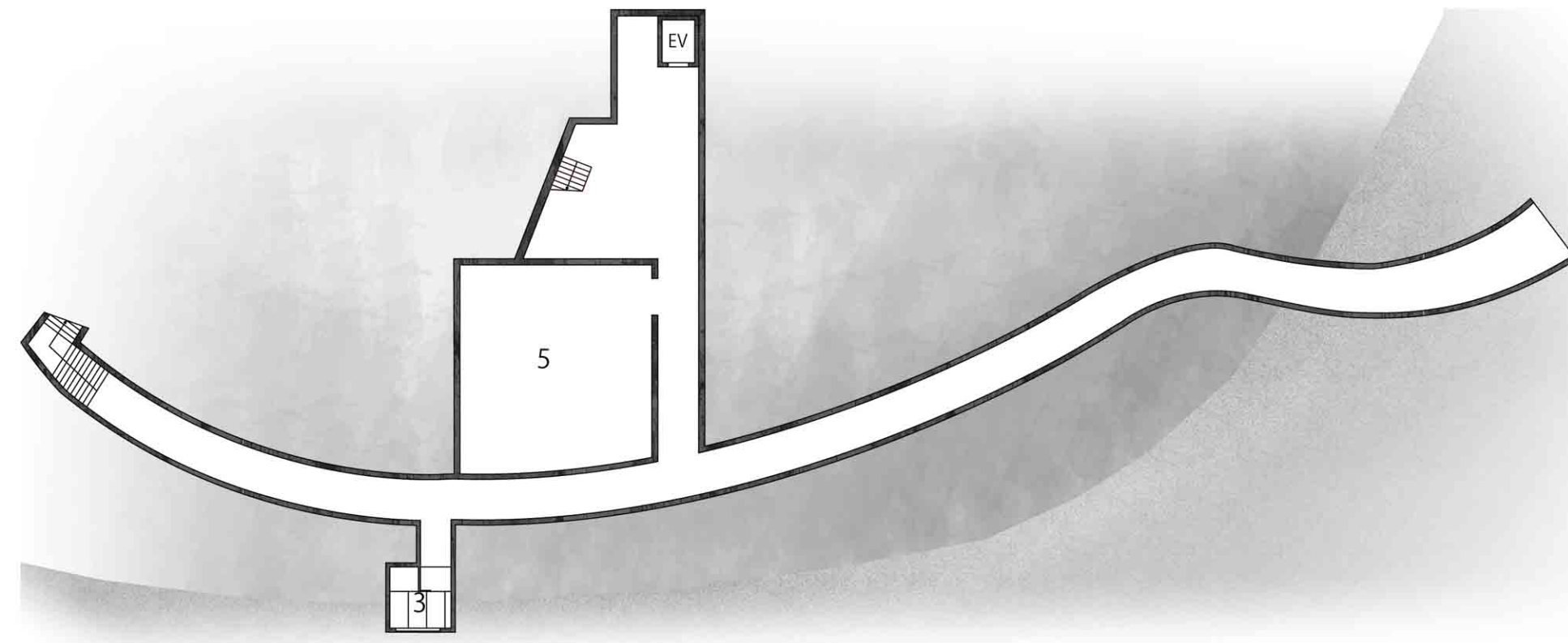
a-a' SECTION 1/300



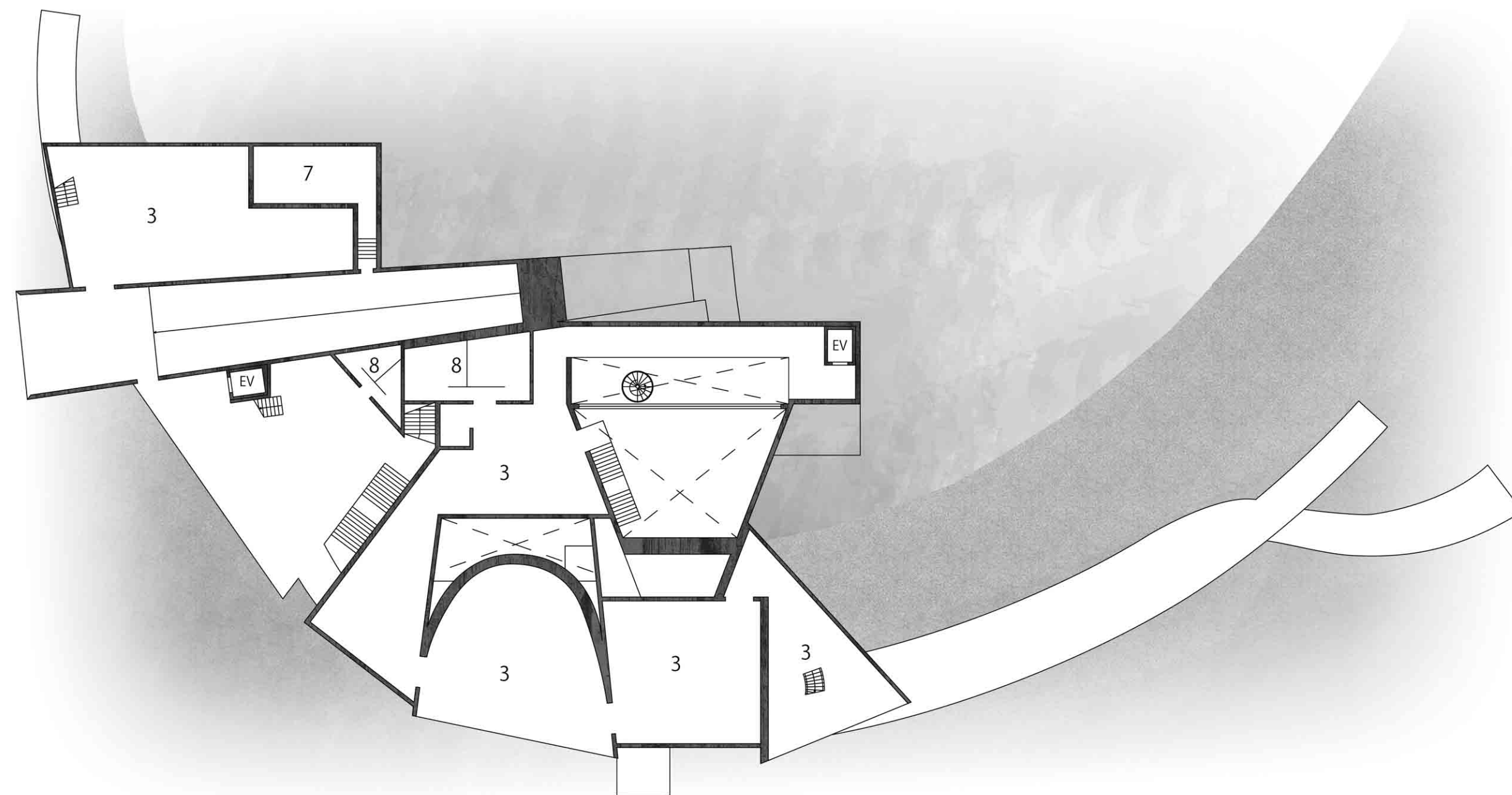
b-b' SECTION 1/300

- 1 entrance hall
- 2 shop
- 3 room
- 4 machinery room
- 5 laboratory

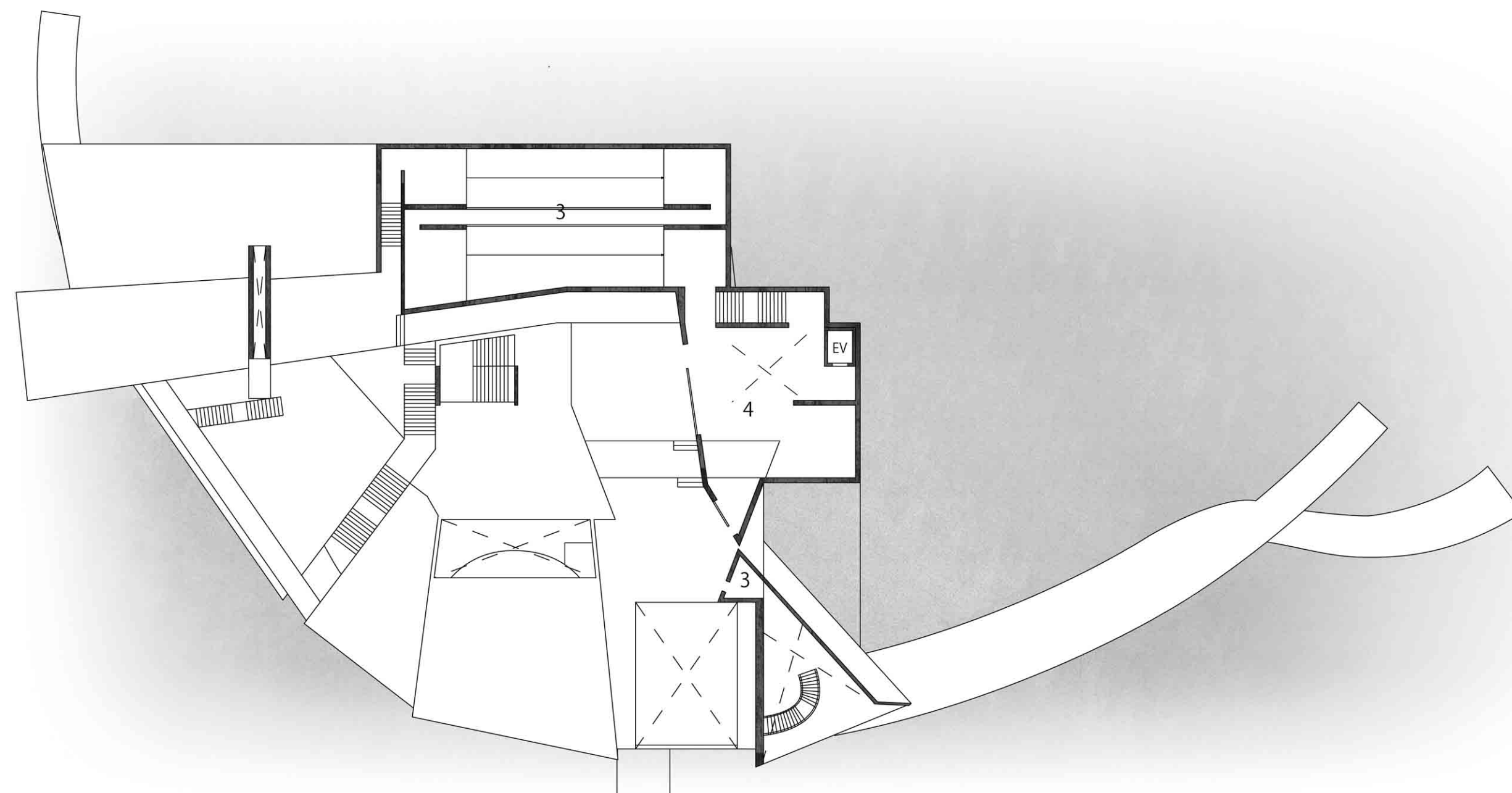




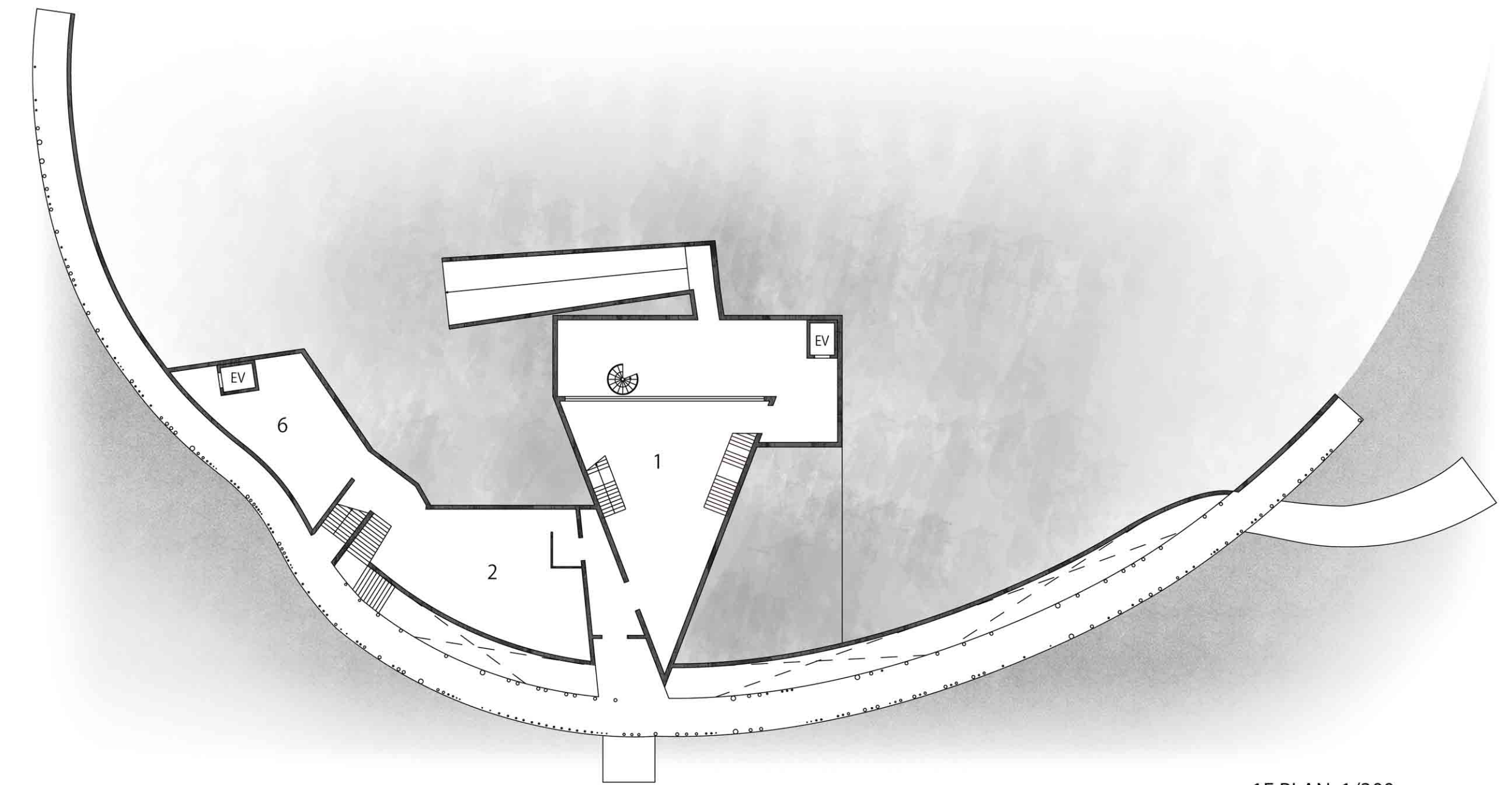
B1F PLAN 1/300



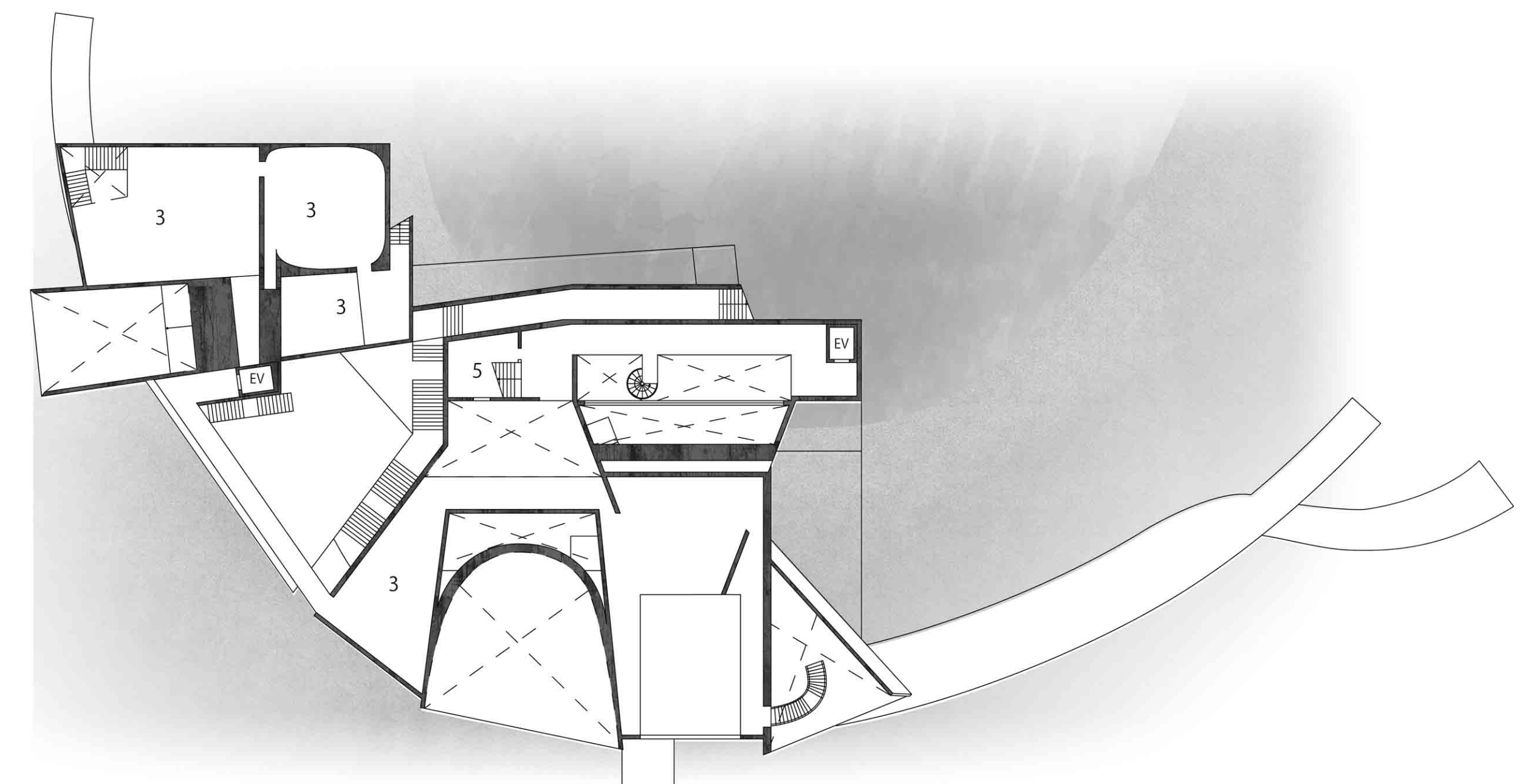
2F PLAN 1/300



4F PLAN 1/300

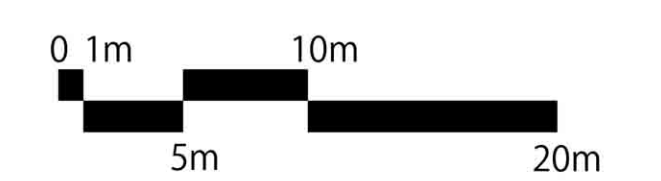


1F PLAN 1/300



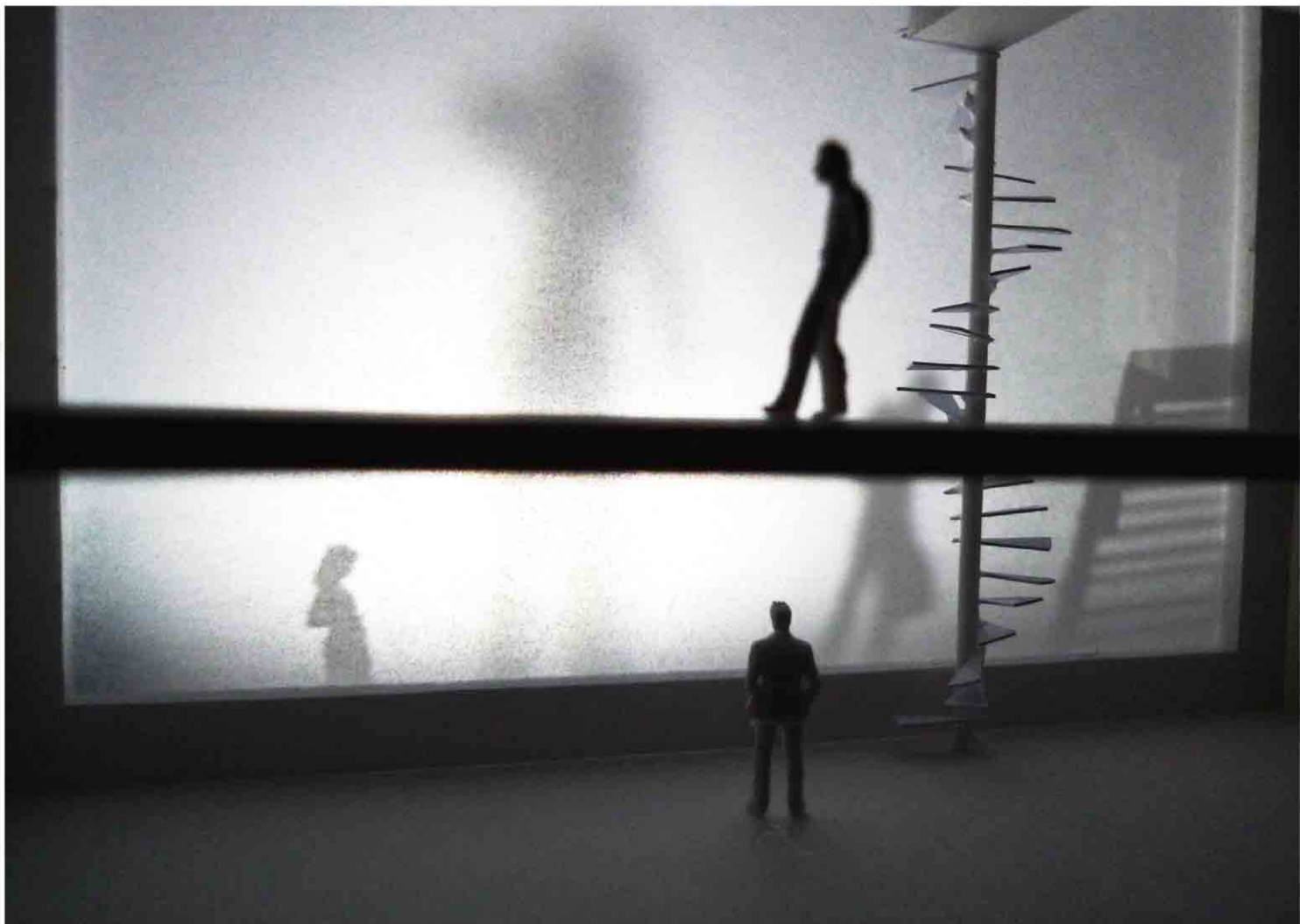
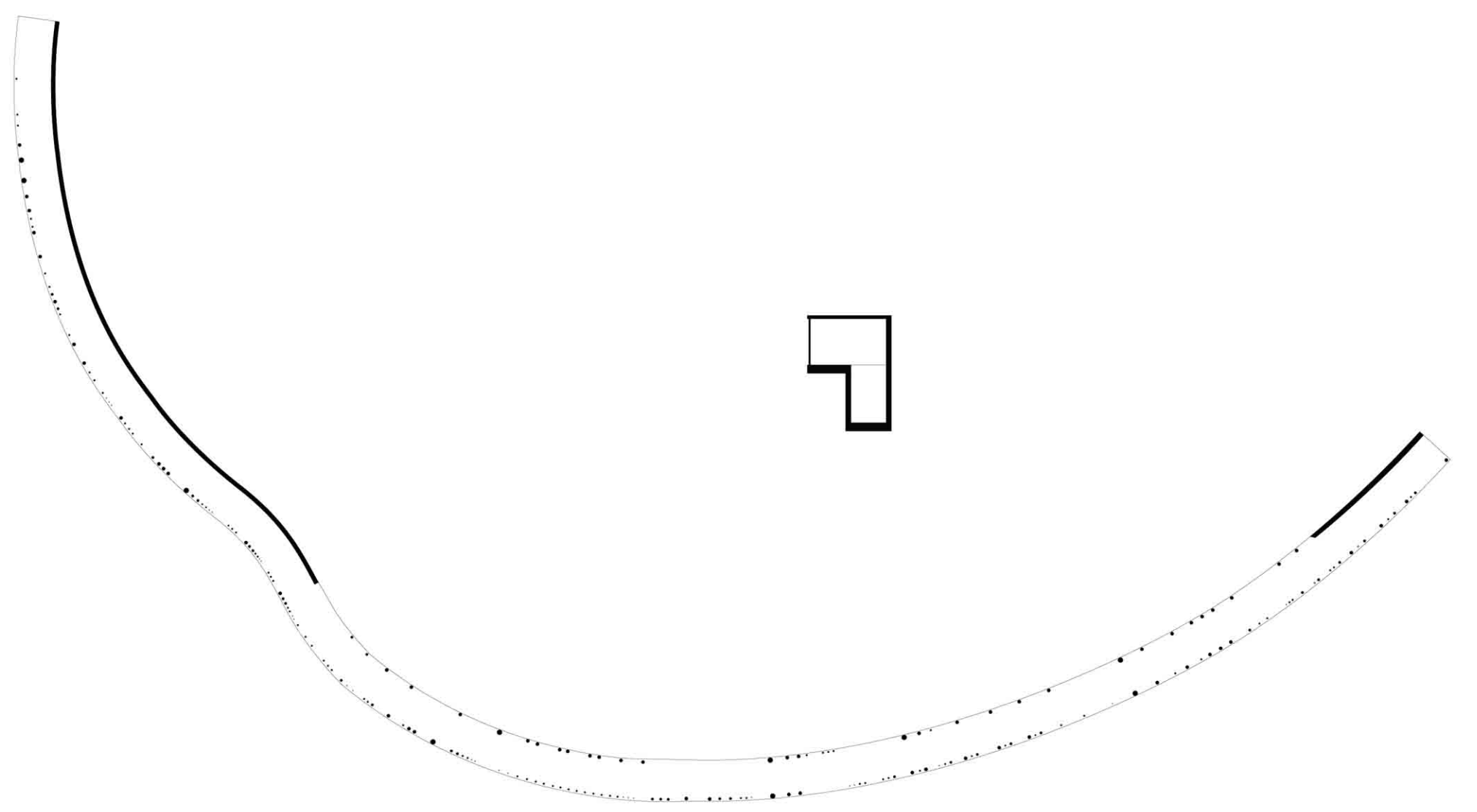
3F PLAN 1/300

- 1 entrance hall
- 2 shop
- 3 room
- 4 cafe
- 5 machinery room
- 6 treasury
- 7 office
- 8 lavatory

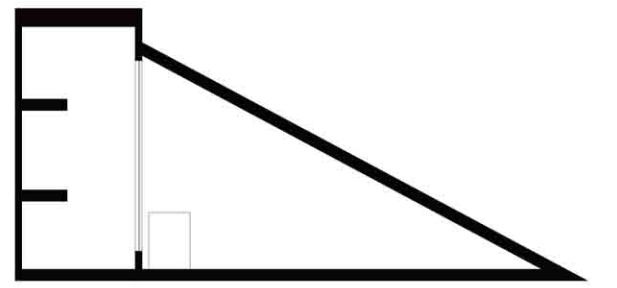
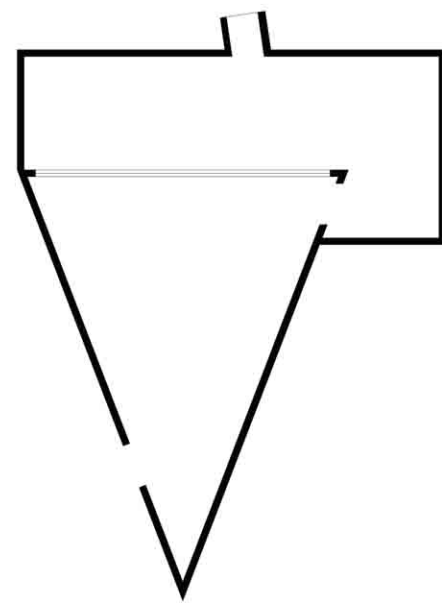




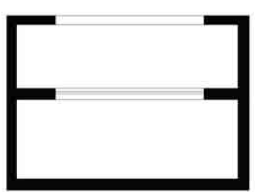
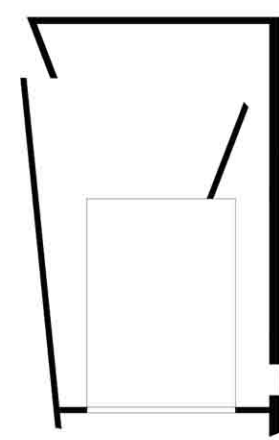
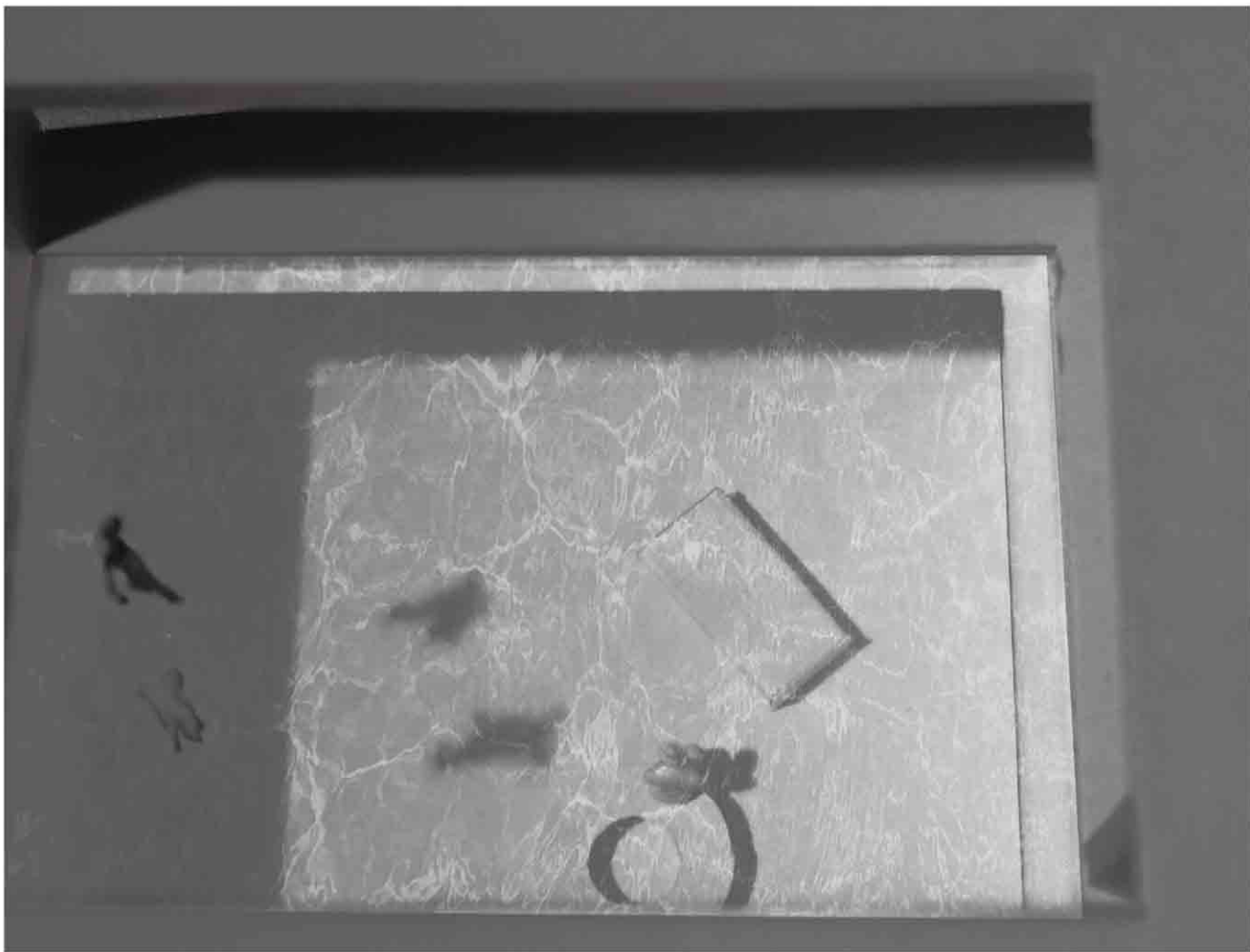
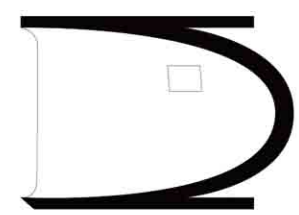
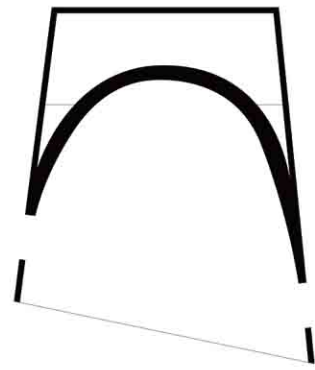
長い遊歩道を歩いて列柱の通路につく。2列に並んだ列柱の影が、まるで音楽を奏でているようにみえる。



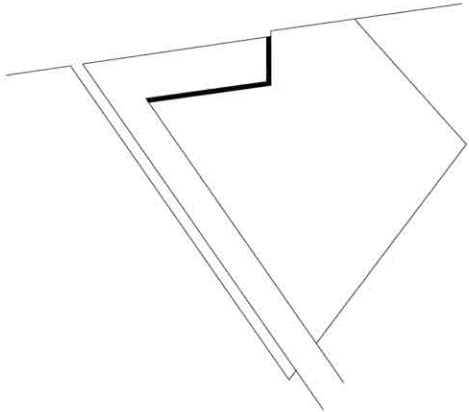
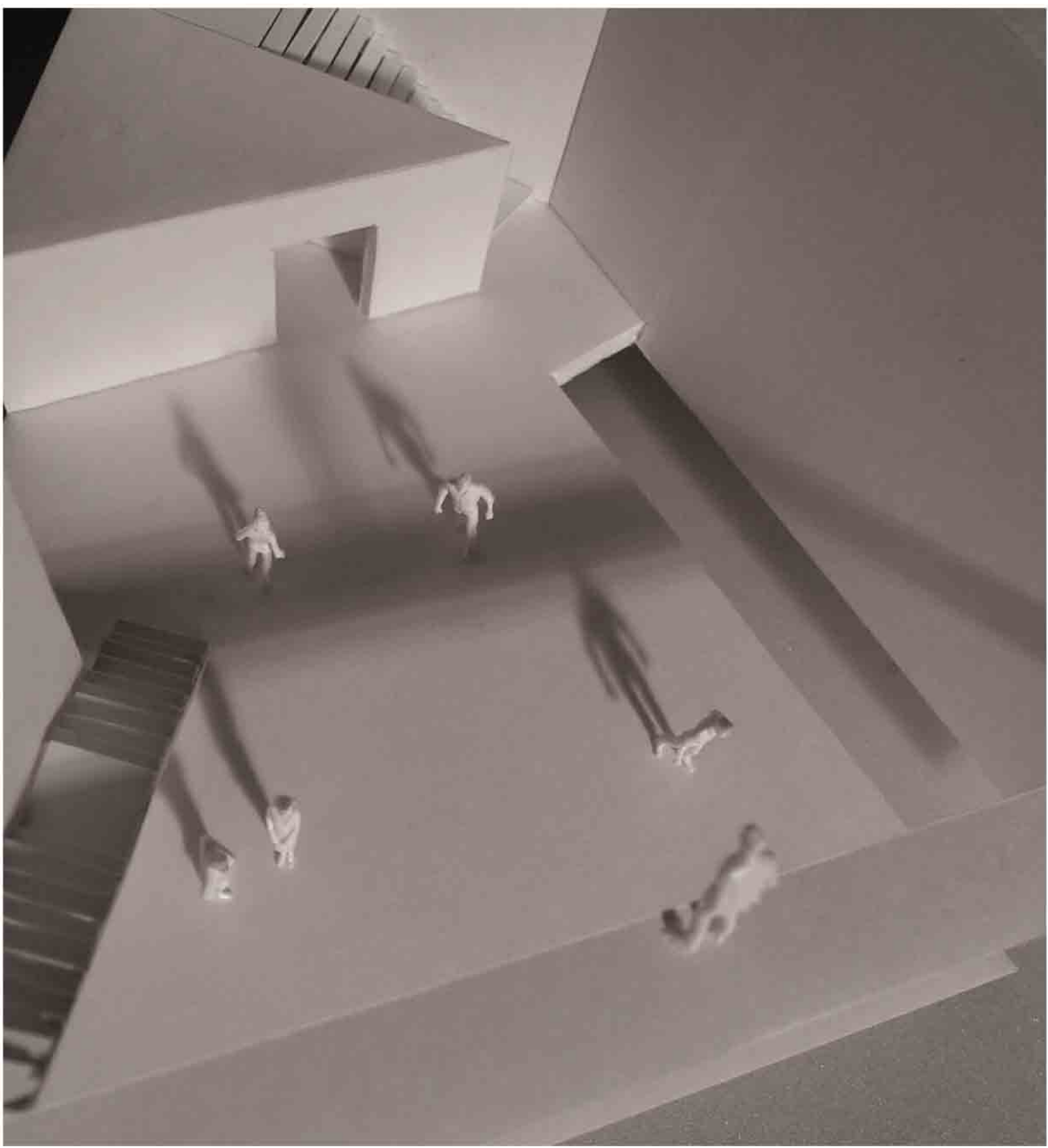
大きな四角錐の空間につく。奥の壁に自分の影が拡大され投影される。奥の壁のうらに回ると、その壁が大きなスクリーンになっていたことが分かる。大小様々な人の影がスクリーンに投影されている。



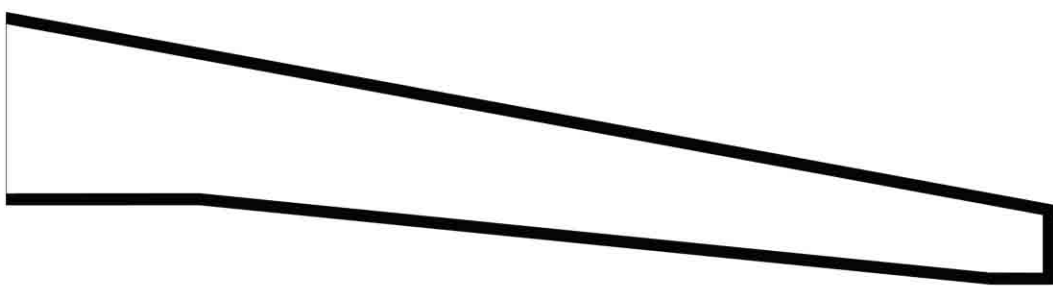
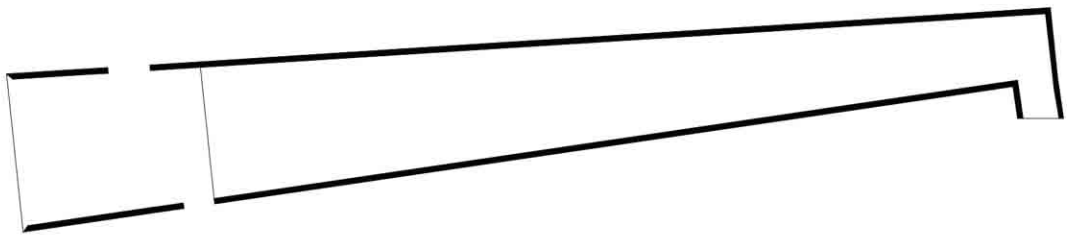
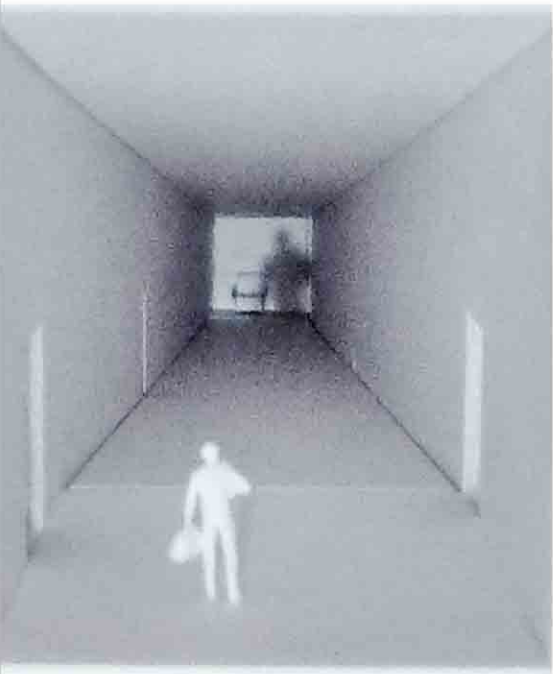
たまごが半分埋まったような部屋にくる。日が沈むにつれて、影が壁面を上って行く。



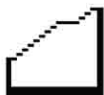
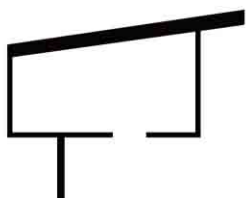
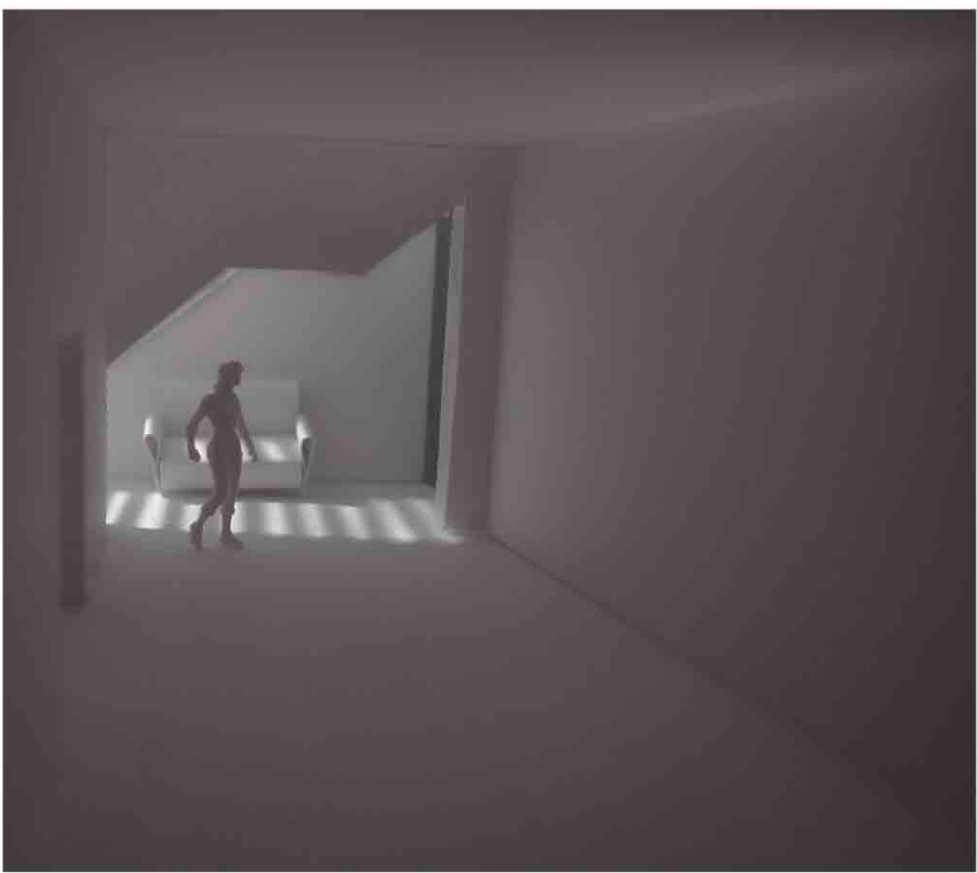
屋根の上が水盤になっている。水のきらめきと水遊びする子供の影が落ちてくる。



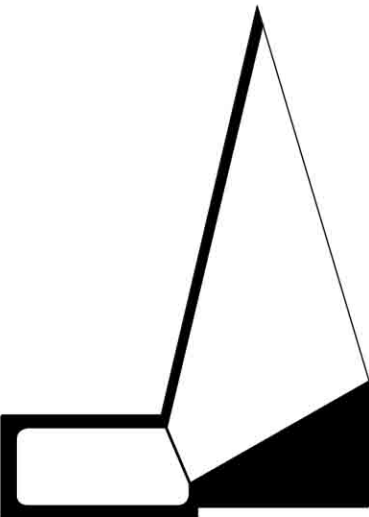
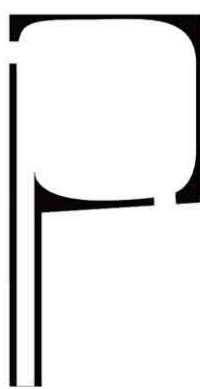
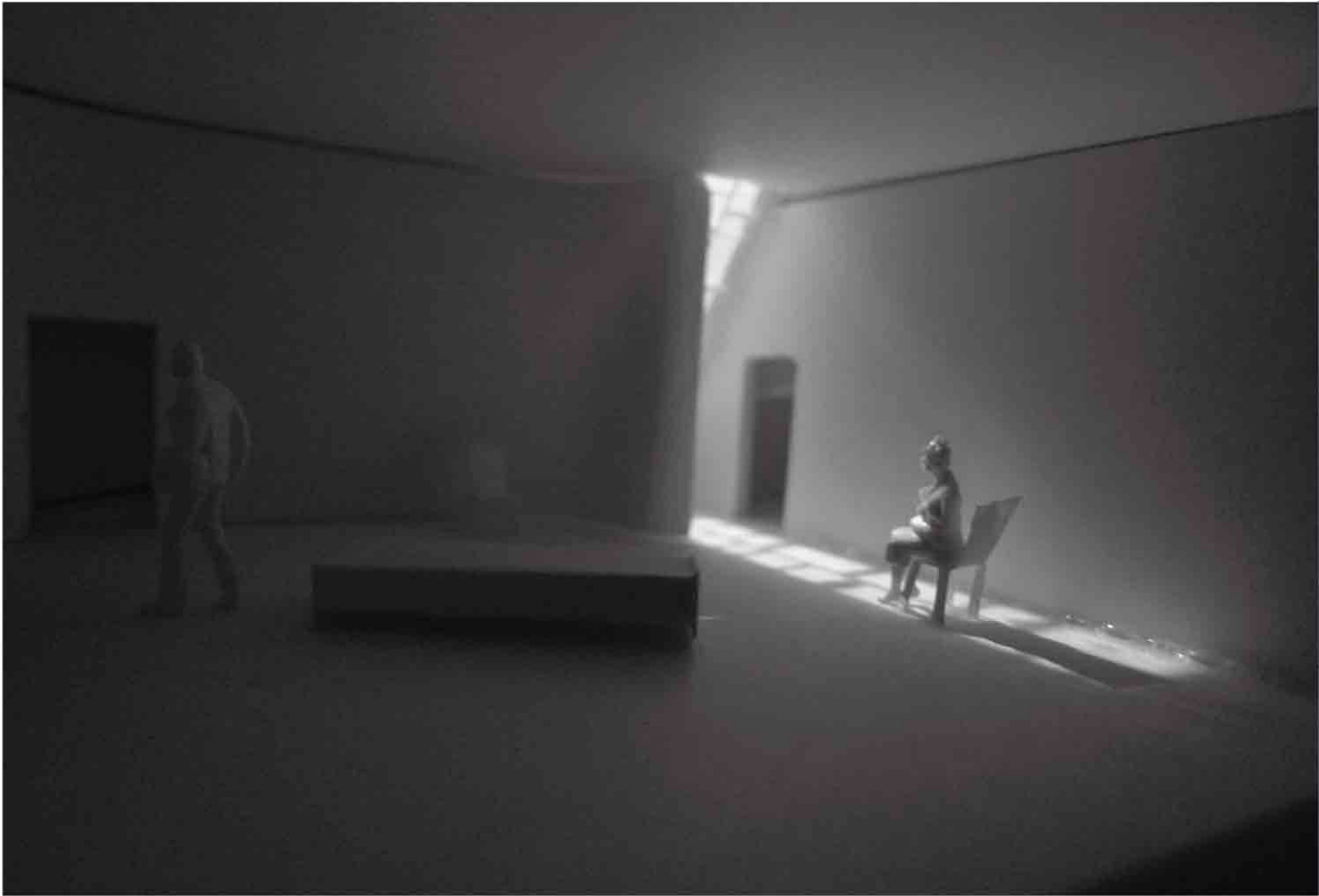
建物を一度抜ける。そこは渡り廊下になっていて下には広場がある。広場に集まる人の影を見ていると、あたかも影の世界が本当の世界になったような気分になる。



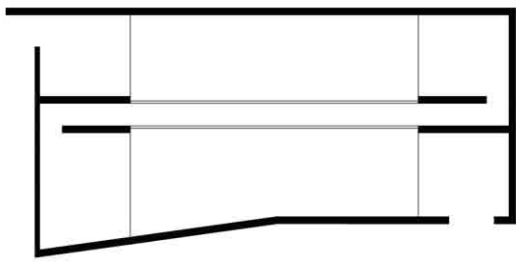
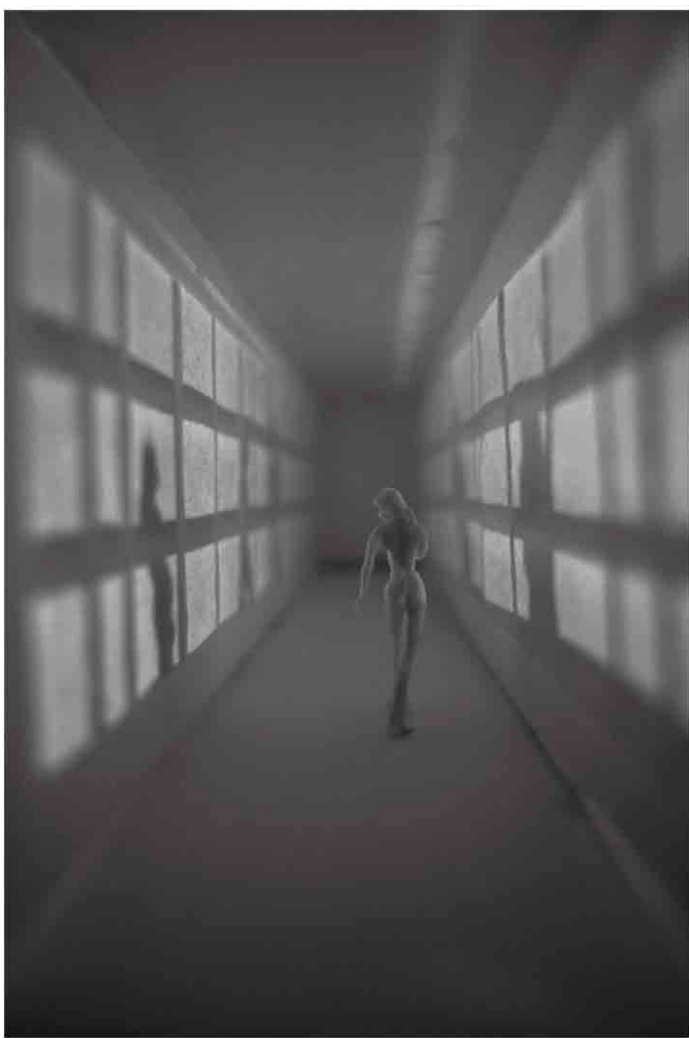
西を向いて伸びる大きな廊下。下り坂になっている。夕方になって来ると、通か向こうの壁に自分の影が投影されている。



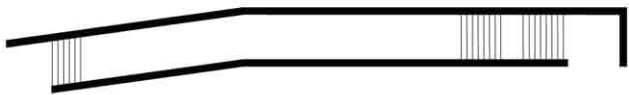
階段の影が映っている。人が階段を通ると、その影は影の横断歩道をあくる。



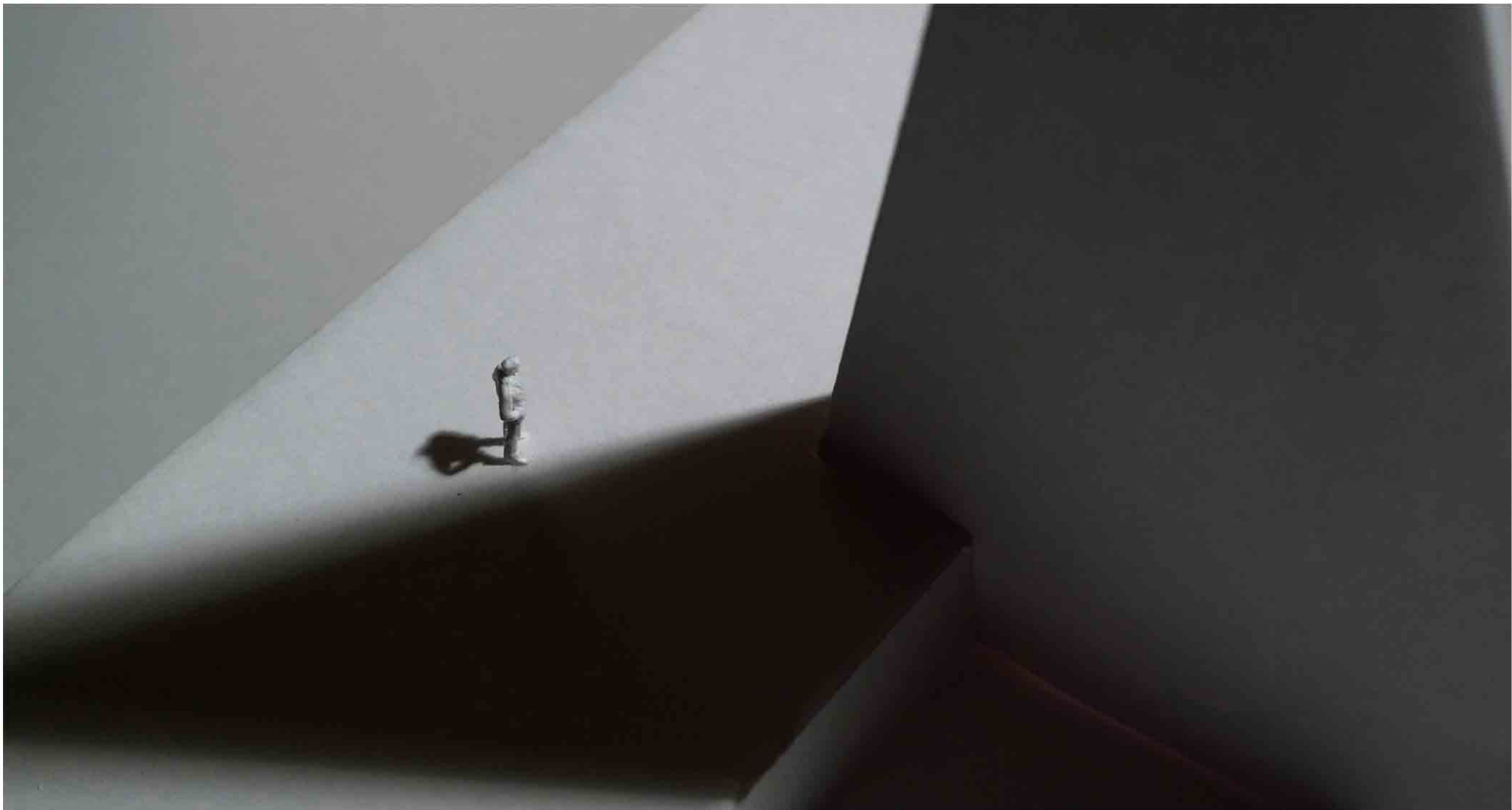
この部では、太陽が南中したときのみ光が差し込み影が生まれる。曲面を帯びた壁が光を拡散し、一気に部屋が明るくなる。



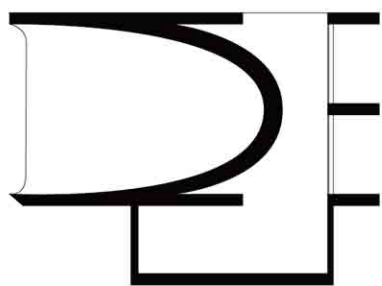
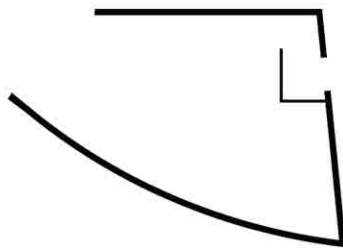
この建物の最上部に位置する。真ん中の通路は障子の壁に挟まれていて、人の影が自分の両側を行き来する。



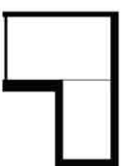
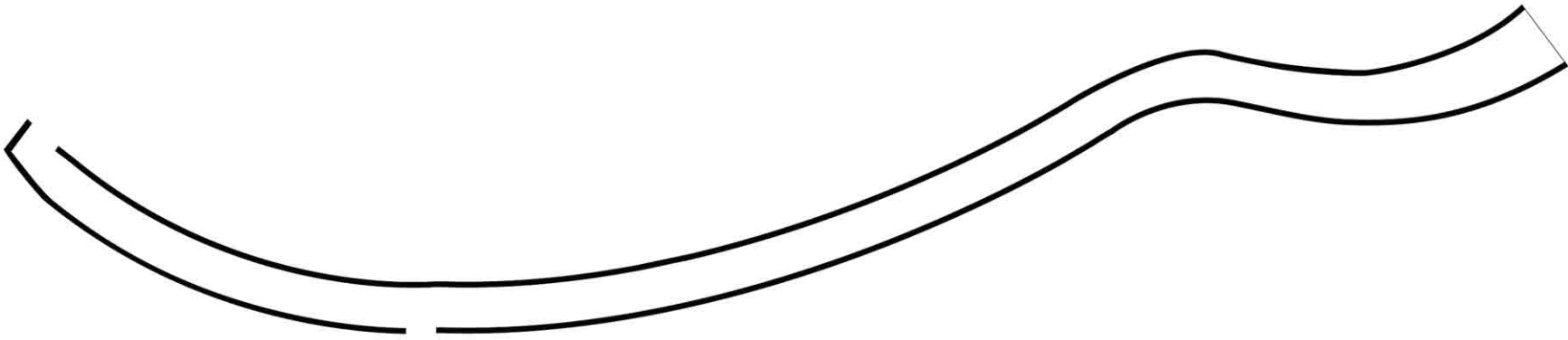
広場から伸びる階段を進むと、細い廊下に入る。南側の壁と天井の隙間にスリットが開けられているため、廊下の中に時間によって上下する光の筋ができる。その筋は、自分の影、上の階にいる人の影により断続的なものとなる。



この塔は、下の階に南中した太陽の光のみを送り込むが、その他の時間でも日時計として、わたしたちに時間を伝えてくれる。



1階から2階の卵の埋まった部屋の北側を眺める。そこには卵のおしりが顔をのぞかして、吹き抜けを挟んだ後ろの部屋にいる人が映し出されている。2階にいる人と3階にいる人、その場所によって色々な影を映す。



この建物を出るときは、一番下の階まで下がる。二列に並んだ列柱の影、回廊を歩くひとの影が大きな壁に投影されている。